

奥日光 湯沢 野湯と沢と幕営のワイルド山行 山行記

日時 10月28日(土)~29日(日)

CL S SL E

O、K、S、S、H、Y、W

湯沢山行ではお世話になりありがとうございました。

厳しい箇所が沢山ありましたが的確なフォローで無事に下山できた事、感謝しております。

豪華な食事を用意していただき、華やいだディナーとなりました。

食品の買い出し等お忙しい中大変だった事でしょう。

重かったにもかかわらず、プールを持ち上げてくれたのでお風呂にもは入れて又紅葉の山にどっぷりと浸かりながら歩けたのも気持ちよかったです。

厳しかったけれども変化のある楽しい山行でした。

ありがとうございました。 W



会初月目でかつ未熟者でありながら参加をお許し下さりありがとうございました。

自身はただ全行程付いていくことに精一杯で、

随所でご迷惑をおかけしながらの山行でした

無事帰還できたこと大変感謝申し上げます特筆すべきは、

あつあつ湯舟と豪華食事の

まるで接待山行のごとく

計画と事前準備

を重ねて感謝いたします

日が当たる斜面の萌える紅葉が未だ脳裏に焼きついていますよ

しばらくはこの写真でおなか一杯です^^; S

今回の湯沢山行 実施前からいろいろなアドバイスをいただき、お蔭様で何とか皆様についていきました。久しぶりの重いザックを背負っての急登のたかまきなど私にとっては結構ハードでしたが素晴らしい紅葉と溪谷美の中の沢歩きは特別な感動でした。

25kg以上のザックを背負って、的確な難場のフォロー、テンバでの手慣れた準備など、

9人の大所帯をまとめる頼りがいのある素晴らしいリーダーでした。素晴らしい山行企画をして頂きありがとうございました。次回も宜しくお願いします。

Eさん、お仕事でお忙しい中、あのような豪勢な献立と食料調達をしていただきありがとうございます。あんな山奥であのような贅沢な夕食をいただけるとは思いませんでした。

また、料理が済んだ鍋を手際よく綺麗にして片づけ行く様子には感心しました。

今度はテンバでのメニュー等を教えてくださいね。

Oさん、沢山の写真と素晴らしい山行記有難うございました。語彙のない私にはあの感動を伝えるすべがありませんが、Oさんの山行記は私の代弁者として余すところなく伝えていただきました。

山行同行の皆様、あのようなハードな山行がケガもなく十分楽しんで無事下山できたのは皆さんチームワークの賜物です。荷分けやテント設営作業と撤収作業、調理等など今回学ぶことが非常に多かったです。ありがとうございました。 H



沢、初心者の私は楽しむと言うより緊張の連続でした。一番軽いザックの私でしたが私の中で最大限の重さで、体力と技術不足を皆様でカバーして頂きました。

沢は、登山の集大成でそれを極めた人は本当に優れた技術の持ち主であることを改めて感じました。

大きなザックを担ぎ上げ、安全登山の為の登攀は絶対安心感が有りました。

Eさん、買い物、食材の下ごしらえキャンプの達人です。

Oさん、素晴らしい山行記と山岳カメラマンありがとうございました。

Kさんへ、人生二回目の沢、下の廊下より緊張しましたよ。

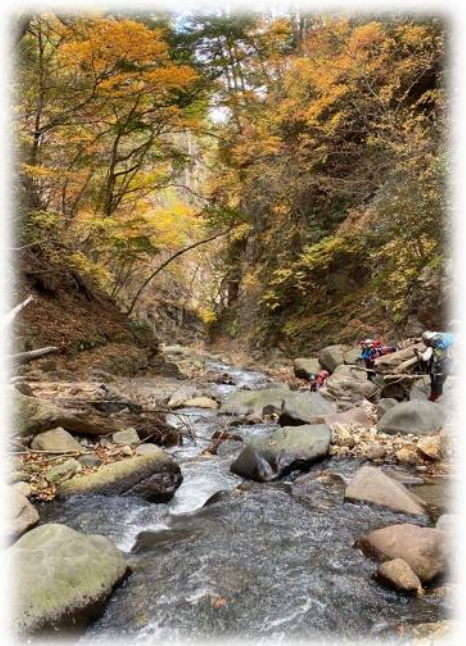
フォローありがとうございました。

参加の皆様大変お世話になりました。 Y

湯沢山行では大変お世話になりました。

6. 7年前に2. 3回参加し、沢道具も揃えて、いつかまたこの沢道具が日の目を見ることができるとか、思いながら過ごしていたところ、やっと！やっと！思いが叶いました♡

同行させて頂き本当にありがとうございました。



ご馳走になった料理の数々、湯舟では心身ともに癒され、皆に喜んでもらいたいという、おもてなしの心が痛いほど身に沁み、感謝の気持ちでいっぱいです。

藪漕ぎ、渡渉、ロープでの登攀、下降も楽しく、帰りの渡渉は胸までつかり、それもまたワクワク、何が起こるかわからない状況に胸を躍らせた2日間でした。

今回で3回目というセイ子ちゃんの気持ちが、よ〜くわかりました。

また、計画されたときは是非参加させて頂きたいと思います。

皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。 S



28日は朝から曇、小雨が降り出す。雨による沢の増水も考えられ、沢の遡行、目的地への到着も危ぶまれたが、話し合いの結果、現地で判断することにして登山口へ到着。

歩き出しから登山道は半ば崩壊しており、行く手は険しい。鹿や熊の糞を見ると、ここは獣の領域であることが分かる。深い森をすすむと赤や黄色、だいたい色に色づいた見事な紅葉が目を楽しませてくれる。まったく我々九人で独占しているようだ。何度か渡渉を繰り返しいよいよ本格的な沢へと近づくが、胸までつかるような水の深さのため、高巻きすることになった。そして今日の核心部、噴泉塔の上部への登攀。フリクションノットを使って足場の悪い崖を文字通り「よじ登る」。

ようやくテン場にいたころには日は沈かけ、テント設営が終わった頃にはあたりは真っ暗、ヘッドンを点けてまきを集め、調理準備を分担して行う。この間にSさんが露天風呂を作ってくれた。女性陣が手際よく夕食の準備をしてくれている間に温泉に入ったのだが想像していたのとは全く違い、なんとビニールプールにお湯をためた「浴槽」が準備されていた。熱めの湯を川の水でうめて体を浸すと厳しい道を歩いてきた疲れをいやしてくれる。全く人工物が無い、山奥での入浴。この場所にたどり着いた者だけが味わえる至福のひとつ。

ヘッドンを消して空を見上げると、雲の間から十四日の月が照らしてくれている。何という開放感だろうか、これほどの自由を感じたことは今まで無い。人はここまで自由になれるのだ。太古の人間が知っていた自由、そして暗闇の恐怖。

— 月の下の野湯につかりて感じる は 太古の人と同じ自由か —

お湯から上がると女性たちが作ってくれた、とてもテント泊とは思えない豪勢な料理がまっていた。モツ煮、揚げなす、エビチリ、青椒肉絲、具だくさんの豚汁、、、

おながが大分満たされたころ、やはりSさんが焚いてくれた火を囲み楽しくおしゃべりに花が咲く。

たき火を見ながら、野生動物に恐れおののき、身を寄せ合って生きてきた、ひ弱で小さな存在だった

遠い祖先に思いをはせる。火を管理することができるようになってヒトから人間になれたのだ。

— 幕営のたき火を囲み語らえば 火に照らされし顔みな赤し —

厳しい道をすすみ、ほっと心落ちついておなかも満たされ、野湯につかり疲れを癒やし、たき火を囲んで語り合う。何という贅沢。決して下界では味わえない経験。とつぷりと夜も更けそれぞれ温泉につかり、眠くなってテントに入る。私は今回が初めてのテント泊だったのだが、テント内はなんとも包まれたような安心感がある。そばを流れる滝の音を聞きながら眠りにつく。夜中に何度か目が覚めると滝の音を雨かと思う。ああ、これは滝の音なのだ。寝ているとテン場近くに鹿がやってきては「ここはおまえたちのいる場所ではない。立ち去れ」と言わんばかりに鳴き声をあげることが数回あった。明け方にはフライシートをたたき雨音を聞き、またうとうと眠りにつく。

— テントにて寝ている夜中に鹿が来て 珍客我らに大きく鳴きたり —

夜が明け、朝食を済ませ、テン場を撤収。さあ、これから崖を下り、水量の減った沢を下ってゆく。崖は二十メートル以上あろうか、滑りやすく急なので、ここでもSさんがロープをはって来て、それぞれの技量に応じてフリクションノット、ムンターヒッチ、下降器等を使って下りる。ここからは沢に膝までつかり、歓声とも叫声ともつかない声を上げながら時に胸までつかり、下ってゆく。温泉が流れ込んでいるためこの時期の沢水にしては暖かい。

沢の両側の木々から風に吹かれて葉がハラハラと舞い落ちてくる。なんとも美しい景色だ。思わずため息が出る。沢から上がってからも、時折差し込む日の光に照らされ輝く紅葉を眺めながら、またしても厳しい道を歩んで下山口へ向かった。

なんともタフで野趣あふれる露天風呂に幕営と、登山の醍醐味あふれる椎名誠の「わしらは怪しい探検隊」さながらの厳しくも楽しい山行でした。

今回の山行を企画してくださったSさん、Eさん、同行の皆さん大変お世話になりました。

ありがとうございました。2023/10/30 ○

